

資 料

パ リ
—— 誕生から現代まで ——
[XXIV]

P.クールティヨン 著
金 柿 宏 典* 訳注

金持になりたまえ... ! (2)

浮かれた女たち

ルイ・フィリップのパリ、それは家屋取壊し屋たちのパリであり（愛書家ヤコブ¹⁾は、彼らの鶴嘴の音を聞くと柩に釘を打っているような気がした）、享樂の夜のパリであり、「金色に煌めく酒と女と少々味気ない恋」のパリ、サン・ルイ島のパリである。そこでエスキロス²⁾は、「その手を執り、花束を捧げようと、河岸の長い曲角で」自分の恋人を待っていたのである。

それは屋根裏部屋や画学生のパリであり、自分たちの名になったあの地区の教会³⁾の周囲に群がっていた「恋の夜の蝶たち」、即ち浮かれた女たちのパリであった。

浮かれた女は名付け親としてネストール・ロクプラン⁴⁾、物語作者としてバルザック⁵⁾、デッサン画家としてガヴァルニ⁶⁾を持っている。ゴンクール兄弟⁷⁾は、「昼は頭の真ん中で髪をきちんと左右に分けている男と暮し、夜は禿頭の男と暮している」この魅力的な小動物を記述している。

（イタリアン大通りの 20 番地にあった当時人気のレストラン）メゾン・ドレでシャンパ

* 福岡大学名誉教授

ンを飲みながら昼食を摂り、酒抜きの水だけで夜食を済ませ、浮かれ女はヴーヴ小路（モンテーニュ並木道⁹⁾）の奥のマビエユ・ダンス・ホール⁹⁾に出かけていく。そこでは偉大な伊達男を囲んで、彼の偉大な妹たち、カンカン踊りの「シダリーズ」たちが踊っているのである。

「マビエユ通りの女たち」les Mabilliennes は、3 スー払えばとれる牛や羊の肉の入ったブイオンが半分入っている大きなボールの料理は食べに行かない。彼女たちはバルザックがメモをとっていたフリコトーの店か、ヌーヴ・デ・プティション街¹⁰⁾の黒馬亭か地下墓地亭かブルドッグのいるイギリス亭¹¹⁾へ食事に行く。

ラ・ボエーム

しかし、食卓のパリ以上に、ルイ・フィリップの治世は、過去の多くの詩や描写を凌駕した一束の詩や描写を提供している。私は思うのだが、すべての中で、ヴィクトール・ユゴーが『ノートル・ダム・ド・パリ』*Notre-Dame de Paris* で、塔の高みからパリを俯瞰した映像が最も印象的なものである。「霧と煙を通し、夏の夜の穏やかな海の波のように小さく押し合い、無数の尖ったパリの静かな屋根屋根。」「鐘楼の巨大な影」が「屋根から屋根へ、この大都会の端から反対側の端へ」移動していく、明け方のパリである。

またさらにユゴーこそが（ノートル・ダムの2本の塔は、彼の名Hを形成しているようではないか？）注意深く「石のフルートで歌う声」に耳を傾け、「首都の騒めきを聞くのである…」「いま聞くこの鐘の音は、パリの歌声なのである。だからこの鐘楼たちの総奏 tutti に耳をかしていただきたい。そして50万の市民の吹きや、セーヌの流れの永遠の嘆きや、止むことのない風のいぶきや、地平の四つの丘の上に巨大なオルガン箱のように据えられた四つの森の荘重で、遙かな四部合奏などをこのオーケストラの上にちりばめてみていただきたい。」（『ノートル・ダム・ド・パリ』辻和、松下和則氏共訳、潮文庫、第三編2「パリ鳥瞰」230-231頁、昭和48年刊）。

ユゴーと共に、私たちは、パリという生命体、『レ・ミゼラブル』*Les Misérables* のほとんど全章に住む怪物の神話の誕生に立ち会う。「パリは自分の下に身を寄せてくるものには何も残さない檜の大木のように、郊外を飢えさせる」とバルザックは悟る。彼は私たちに怠け者たちがさまよい歩くこの迷路を、この大都会のすべての田舎を描いてみせる。その田舎で空気は「私たちを夢で覆ってしまう不透明な湿気を」持っているのである。こ

の「異様な驚異」monstreux merveille の中で、ネルヴァル¹²⁾は、錫を張ったカウンターのある居酒屋ポール・ニケの店¹³⁾で酒を飲んでいましたが、カウンターの後には樽やら鏡を嵌めた小部屋があり、その中からは人から見られずに外を見る事ができた。それはドーミエが描く淫売屋であり大道芸人や銀行家たちのパリであり、そのパリをミシュレはこよなく愛したのである。

しかし、1843年7月、人々が特に話題にしたのウジェーヌ・シュー¹⁴⁾の『パリの秘密』*Les Mystères de Paris*¹⁵⁾である。それは輝かしい成功だった。カフェで人々は『デバ』紙を奪い合っていたが、その小説がその新聞に連載されていたからである。(この新聞は節約家の読者のため30分間10スーで貸し出されている)。「作者が一日でも遅れると、とサント・ブーヴ¹⁶⁾は言っている、美しい御夫人方や小間使たちは心配してしまう。」と。

ダブランテス公夫人¹⁷⁾がサント・ベヴュと呼んでいたサント・ブーヴは、リュクサンブール地区に隠遁していた¹⁸⁾。ミュッセ¹⁹⁾は大いに退屈している態度を示していた。ユゴーはぐんと短い長ズボンを通り首筋の上で髪を束ねていたが、マレ地区のロワイヤレル広場の(現在ではユゴー博物館になっている)家に住んでいた。バルザックは肥った小男で足が短く復活祭の卵のように赤ら顔だった。アルホンス・カール²⁰⁾はモンマルトルでクッションに座ってトルコ風に暮らし、愛犬フリッツシューズを散歩させていた。真中から髪を左右に分けたジョルジュ・サンド²¹⁾は、小柄でメランコリックで、「男たちの中の王様、女性たちの中の女王」だった。アレクサンドル・デュマはブルー街(BleuであってBleueではない)に住んでいた。文学的夜会で目をむいている彼は、パリで最も有名な人物だった²²⁾。

それは黄金の仔牛を賞賛する拜金思想の時代だった。ハインリッヒ・ハイネは小麦取引所²³⁾ 界隈の単調で神秘的な物音に注意をし、「滴る水滴のような」音を聴く。「それは一滴一滴と絶えず資本家の金庫の中に落ちる資金の利息である。」かくてラスネール²⁴⁾は、泥棒仲間の花形で、フロックコートを着用し、口髭と顎の下に首飾りのように剃り残した髭をたくわえ、無政府主義者として、歴史家として大臣の意見を自分流に追究する。「良心の苛責なく殺人をすること、それは第一番の幸福だ」と彼は言った。彼は断固として「ギロチンの大錠」を選んだ。

カルチュ・ラタンでは、フランス座よりボビノ劇場²⁵⁾が人気だった。人々はグランド・ショームイール²⁶⁾で踊った。またリュクサンブール公園を散策する。学生はシルクハットを被り、立襟のクエーカー教徒風の服を着、白ネクタイを締め、濃紺の長ズボンを穿い

ていた。小鳥たちが花盛りの木犀草が飾ってある屋根裏部屋の上で嘔っている家々の界限で、どこかのお針子を盗み見ているその学生に会うことになる。彼にとり毎日 100 スー銅貨 1 枚を「稼ぐ」ことが問題になるのである。彼はミュルジュール²⁷⁾の仲間たちを賛美する。これらの若者たちは、彼らの親方自身に言わすれば、「才能と酒の革袋を持つべく運命づけられているが、今は一時的にどちらも持たない」人たちなのである。グロはセーヌ川に投身自殺をする（XIXの注3を参照）。クールベ²⁸⁾は、ミュルジュールと一緒にカフエ・モミュ²⁹⁾で偶然出会ったボードレールの肖像を描いている。

フランス座で、ミュッセの『気まぐれ』*Un Caprice*が上演される³⁰⁾。人々はフランス座にラシェル³¹⁾の台詞を聴きに行く。彼女の語調は熱烈で激しく、歯を喰いしぼり、中高の額、両眼は寄り、小さな頭にしっかりくっついた頸、痩せぎすの体、自由な足取りで、女性の声としては最も低いコントラルトの声で、最もデリケートな抑揚で正確に単純に、ラシーヌやコルネイユを朗読して観客を戦慄させた。怒り、憎悪、愛情が彼女をして次々にカミーユ、エルミオーヌまたはフェードルに変身させた³²⁾。「彼女独得の幻影のように蒼白で、とテオフィル・ゴーチエ³³⁾は言う、彼女の大理石の仮面の中の赤い目、しなやかでしかも生気のない両腕、真っ直ぐな襷の美しい衣裳に包まれた肉体」。更にオペラ座のダンサーがいる。派手やかな足をしたラ・タグリオーニ³⁴⁾、カルロッタ・グリジ³⁵⁾、ファニー・エスレル³⁶⁾、リボンで髪を飾ったバッカスの巫女。またデジャゼはバレ・ロワイヤルでデゾジュール作のシャンソンを歌う。マリ・ドルヴァル、ラ・マリブラン³⁷⁾、この歌姫は「鋭い調子でシ音を歌いだし、それを持続し引き締め、最もまばゆい頭音トリルを響かせる前に、ハ音でシ音を打ち消す」。オペラ・コミック座³⁸⁾で『ザンパ』*Zampas*³⁹⁾が上演される。ブッフ座では、ドニゼッティの最後の歌劇『ドン・パスカレ』*Don Pasquale*が上演された⁴⁰⁾。フレデリック・ルメートル⁴¹⁾は『アドレの宿』*L'Auberge des Adrets*⁴²⁾の中でロベール・マケール⁴³⁾を演じ、パントマイムのドビュローはフェナンビュール座⁴⁴⁾で『ピエロの不幸』*les Infortunes de Pierrot*を創造した。

ルイ・フィリップのバリ、それは乳母たちの毛織物のバリであり、家庭用の浴槽の、街燈の点火の、二輪馬車の、頭の天っ辺に被るかつら faux toupets の、セレストン河岸⁴⁶⁾で横顔を見せている洗濯女たちのバリであり、人々が藁蒲団に身を横たえる安宿のバリ、萎れた花束を差し出す乞食たちのバリであり、淫売屋と古い杖で地下水脈を発見する女占師の、鉄道と銀板写真のバリであり、そこでは一文無しの王子のように暮らしているジャーナリストが支配していた。最終的にはメロドラマの、悲劇の短刀の、生きているような繰

り人形のパリであり、陰惨な物語を集めた一巻を包み込んでいる犯罪大通り⁴⁷⁾のバリであり、そこでは血みどろの幽霊たち、姦通、暴行、近親姦姦、親殺しなどが物見高い弥次馬たちの視線に厚かましく提供されたのである。

48年の革命

2月24日、ラマルチーヌを取り巻く数人の決起した政治家たちにより市庁舎で宣言された臨時政府から、1848年の共和政は始まった⁴⁸⁾。その極左派はピエール・ルルー、ブルードン、ブランキの理念を栄養源としていた。ジョルジュ・サンドを中心に集った女性たちは祖国に奉仕したいという欲求に駆られ頭が変になり、「ヴェズヴィエンヌ」vesuviennes⁴⁹⁾の名の下に自らを組織化しようとした。『ジュルナル・デ・コティオン』*Journal des Cotillons*は『出征の歌』*Chant du Départ*⁵⁰⁾をもじって彼女たちを嘲笑した。

「進め！大地を解放せよ。

余りも長く支配していた暴君から！

髭に対して宣戦布告しよう

髭をきってしまう、すべてを切ってしまう！」

しかし「火付け女たち」pétroleuses⁵¹⁾の子孫たちの中に婦人解放の使徒、注目すべき女性たちがいる事には変わりはない。革命家たちは父なる神にキリストの社会主義的傾向を対立させる事により、子なるキリストを復権させる。祝典が挙行される。自由の木⁵²⁾を再び植樹しその下で人々は幻想を作り上げる。コンコルド広場のオペリスク⁵³⁾は三色の装飾用ののぼりで覆われる。人々の祝宴は、パッシー⁵⁴⁾、バティニョル⁵⁵⁾、モンバルナス⁵⁶⁾の城柵、モンマルトル⁵⁷⁾、モンルージュ⁵⁸⁾で連続して開催される。クラブが再興される。ルイ・ブランの煽動で、臨時政府は「労働権」le droit du travailを宣言し、国立作業場⁵⁹⁾を設置したのは、さまざまな職業の労働者たちに仕事を与えるためであった。しかし、到る所で、ストライキが続発する。共和主義者たちを深刻な亀裂が分断する。あの人たちはブルジョワ階級に支持を求め、他の人たちは社会の完全な改革を要求したからである。

かくして、国立作業場の閉鎖の後、流血の6月の日々となり、怒った労働者の蜂起、市東部と中央部のバリケードの構築と続き、カヴェニャック將軍⁶⁰⁾に反乱鎮圧の独裁権が

委任される。6月23日から26日にかけて、パリは恐ろしい市街戦で流血の巷と化した。パリ大司教アフル猊下⁶¹⁾は、双方を鎮めようとして、数人の将軍たちと同様に殺害される。最終的に、軍隊と国民衛兵隊が、「死体の上に秩序」を再建するが、同時にもはや防衛してくれる人を失った共和政にも同じ打撃を与えたのである。

溝が出来てしまった。それ以後、警察と革命は仲の悪い夫婦になる。ルイ・ナポレオンは復帰を予想できた。彼は暫くの間ヴァンドーム広場のライン館⁶²⁾に滞在し、大統領選に立候補する準備にとりかかる。彼は既にストラスブールで、次にブローニュで皇帝になる宣言をしようと試みなかっただろうか？⁶³⁾

ハム要塞監獄に監禁されていた彼は、噂によればバダングという名の石工に変装してそこを脱走し⁶⁴⁾、ロンドンに逃れ、そこで何人かの保護者を見出していた。

ナポレオンの理想と安定の原則の保護者として立候補した彼は、1848年12月10日に選出され⁶⁵⁾、憲法に対して宣誓する。しかし、既に、圧倒的多数で権力に就く事を承認された彼は、「親王大統領」*prince-président*と呼ばれていた。彼は、共和派との戦いのために王党派から大臣を選んだ⁶⁶⁾。議会がシーソー・ゲームをしている間、ルイ・ナポレオンは、6月の流血の日々の記憶を民衆の中から消すために国内を巡視し始めたのである。

パ リ

—— 誕生から現代まで ——

(訳 注 XXIV)

1) le Bibliophile Jacobe, 本名 Paul Lacroix (1806-1884) : フランスの作家, ジャーナリスト, 1885 年からアルスナル図書館長を務めた。歴史小説を創作するが, 社会風俗や文化史関係の著書が多い。『金銀細工師と宝石職人の歴史』 *Histoire de l'orfèverie et de la joaillerie* (1850), 『売春の歴史』 *Histoire de la prostitution* (1851-54), 『フランスの歴史的衣裳』 *Costumes historiques de la France* (1852) などで, その博識振りを披露している。

2) Henri-Alphonse Esquiros (1812-1876) : 小ロマン派の詩人, 小説家, 民主主義者。ペトリュス・ボレル (1809-1859) を知り, 青年フラン派とも交際した。処女詩集『燕たち』 *Les Hirondelles* (1834) は成功しなかったが, ジャーナリズムの世界に入る端緒となり, 時代の民主主義的思潮の影響から, やがて熱烈な共和主義者になった。過激派の暴徒として逮捕されたサント・ペラジ刑務所でラムネーを知り, 共和主義の信念をより強くする。『モンタニャール派の歴史』 *Histoire des Montagnards* (1847) を出版, その功績を紹介する。第 2 共和政の 1882 年ムーズ県より代議士に選出されるが, ルイ・ナポレオンのクー・デタ (1851.12.2.) に反対し亡命, 第二帝政崩壊後に帰国, ブッシュ・デュ・ローヌ県選出の代議士となり, 1876 年には上院議員になった。作品に見るべきものはないが, その思想信条がボードレールに影響を与えたといわれる。

3) église Notre-Dame-de-Lorette を指す。現在は第 9 区シャトーダン街 18 番地になっているが, この教会が建立された当時は, この通りは存在しなかった。教会は 1823 年 8 月 15 日工事開始, 1836 年 12 月 15 日に奉献式が挙行されて完成している。この教会の立っている広場からサン・ラザール, コクナール (現在のラマルチヌ), マルチールの 3 本の通りがでていたが, 1835 年に新道が開設され, この街路がこの教会を起点としたため, ノートル・ダム・ドーロレット街が誕生したのである。長さ 485 米, 幅 13 米の新道であった。ルイ・フィリップ治下の 1840 年, この街は高級娼婦の住む所となり, これらの美女たちを人々は「レ・ロレット」les lorettes と呼んだ。ロレットなる語は, 説明が困難な職業の娘の状態を示す常識的な単語だが, アカデミー・フランセーズの御老人たちは羞恥心からこの単語の定義を放置している, とバルザックは述べている。

4) Louis-Victor-Nestor Roqueplan (1804-1870) : ブッシュ・デュ・ローヌ県マルモール出身、マルセユで学業を終えて、1825年に上京しジャーナリズムの世界に入り、「フィガロ」*Le Figaro* 紙主幹となり、王政復古政府を攻撃、7月革命の勃発に貢献した。しかし生粋のパリっ児でなかった彼は革命運動に没入する行動の人ではなく、闘争するより観察する人で、パリのカフェ、オペラ座、繁華街の風俗、世態人情に通暁しており、劇場の楽屋や舞台裏の挿話に関しては知らぬ事はない批評家であった。また社会の新動向や事件を適確に表現する新造語作成の名手として注目されていた。新市街の人目をひく新住民たちを「レ・ロレット」と命名したのも彼である。彼は多くの新聞や雑誌に劇評や風俗時評や随想を発表したが、著書としては『オペラ座の舞台裏』*les Coullisses de l'Opéra* が代表作としてあげられよう。オペラ座の支配人として経営に四苦八苦した苦労話も捨て難い。

5) 「人間喜劇」と題した作品群の中で、「風俗研究」部門の「パリ生活情景」に分類される作品『浮かれ女盛衰記』*Splendeurs et Misères des Courtisanes* (1838-47) の中で、バルザックは主人公リュシャン・ド・リュバンブレに献身的な愛を捧げる娼婦エステル・ヴァン・ゴブセックを描いている。聖母に変身する娼婦、新しいマノン・レスコーとしてバルザックはエステルを登場させるが、彼はその他の作品でもさまざまなロレットたちを描いている。

6) Sulpice Guillaume Chevalier, 別名 Paul Gavarni (1804-1866) : フランスのデッサン画家。最初、精密器具製作の工員となり、つぎにオート・ピレネー県タルブ市の土地台帳課に勤務していた(1824-28)時、すり鉢型の地形のシルク即ち圏谷で有名な近郊のガヴァルニを名乗ったという。ピレネー山脈の風景や人々の服装を描いた後、パリに上京、エミール・ド・ジラルダン(1806-1881)の「モード」*la Mode* 紙でデビューした。その後「カリカチュール」、「ジャリヴァリ」、「ロンドン絵入り新聞」*l'illustrated London News* に約8,000枚の作品を発表する。1833年新聞を発行するが18号で行きづまり破産、その負債のため1年間投獄された。画筆の才は経営の才をとまなわなかったのである。彼は情け容赦の無い筆致で、同時代の人々の姿を描いた。『学生たち』*Les Etudiants* (1838-40)、『ロレットたち』*Les Lorettes* (1841)、『女優たち』*Les Actrices* などがある。19世紀のボヘミアンを描いて、彼の右に出る者はいなかった。彼はゴンクール兄弟に対して美学的靈感を与えており、兄弟はそれにより作品『シャルル・ドマイイ』*Charles Demailly* (1858)の登場人物ラリガンLaligantを創作した。彼らにはガヴァルニ研究に貴重な文献を残している。またボードレルはガヴァルニの作品を7月王政末期の貴重

な資料と評価している。ノートル・ダム・ド・ロレット衛の中心のサン・ジョルジュ広場に彼の銅像がある。

7) les Goncourts : 兄 Edmond (1822-1896), 弟 Jules (1830-1870) は写実主義の小説家。ナンシーの名門の出で多額の遺産を相続したため生活のため働く必要がなく、一生を創作と研究に専念できた。兄弟は、自然主義文学, 18世紀美術の復活, 日本趣味 le japonisme の流行の三つをつくった事を誇りとしている。彼らは同時代の社会のあらゆる面を観察し、それを精緻微細にメモし、その記録を素材として創作した。歴史家は過去の語り手だが、小説家は現代の語り手である、というのが彼らのモットーである。2人が特に関心を持ったのは、人間精神の暗黒面であり、そのため神経病や精神病について観察するため病院を訪問している。また道徳心の喪失により墮落し犯罪に走る無智な庶民の生活も見聞している。代表作『ジェルミニー・ラセルトゥー』*Germinie Lacerteux* (1864) は、田舎からパリに出て来た無智な女性が男の歓心を買うため借金し、それがもつて破滅していく陰惨な作品であるが、当時の社会の実相をありのままに活写した写実主義文学の傑作である。また日本人の画商林忠正から入手した浮世絵の研究に没頭、『歌麿』*Outamaro* (1891), 『北斎』*Hokusai* (1896) を出版し日本趣味ブームを惹起し、印象派の画家たちに多大の影響を与えた。しかしなんといってもゴンクール兄弟の最大の傑作は22巻に及ぶ『日記』*Journal* (1887-96) である。当時の文壇の内幕や社会全般の事象についての綿密正確な記述はこの『日記』を第一級の貴重な文献たらしめている。弟の死後、兄は「グルニエ」と称した自邸に友人の作家たちを招いて小さなサロンを開いたが、これが今日のゴンクール賞を授与しているアカデミー・ゴンクールの母胎となった。兄エドモンは単独で『娼婦エリザ』*La Fille Elia* (1877) を創作、売春婦の世界を赤裸々に描いている。

8) avenue de Montaigne : 第8区にあり、アルマ広場とシャン・ゼリゼのロータリーを結ぶ長さ615米、最狭幅38.5米の大通り。ボンバドゥール夫人の弟マリニー侯爵アベル・フランソワ・ポワソン (1727-1781) は、妹のお蔭で出世し王室建物総監の要職についていた。彼は姉が入手したエリゼ宮に住み、1764年には自分のものにする。当時この辺りは郊外の荒地地だったので、市街地らしくしようとの配慮から、街路樹などを植えて整備しようとした。榆の街路樹が2列に植えられて風情が出たが、昼でも薄暗くなったので、そのため恋の冒険を享受しようとする遊び人を目当にする女性が出没するようになり、「未亡人の小道」*allée des Veuves* の名が生まれた。1720年頃は「溜息の小道」*allée des Soupires*, 1750年頃は「青春通り」*avenue Verte* とも呼ばれ、現在のモンテーニュ大通

りは、1850年の命名である。

9) Le bal Mabilille : 第8区のモンテニュー大通りの49番地から53番地にあった。当時大人気のダンス場。1813年に此の地のPetit Monlin-Rougeという軽食堂の経営者マビユーはサン・トノレ街のアリグル館でダンス教室を主催していた優秀なダンサーだった。彼は夏の間この軽食堂の周辺の土地でダンス・パーティーを開催、最初は自分の生徒が父兄同伴で参加するだけのパーティーだった。やがて入場料50サンチームを払えば誰でも参加できるようになる。マビユーの息子ヴィクトールはこの野外ダンス場を整備、砂を敷きつめた小道、芝生、ギャラリー、小さな森、洞窟などを造成、人工の椰子の並木をつくり、3,000もの円いガス燈をつけた。ロレットやグリゼット(女工たち)やダンディなどの時代にこのダンス・ホールは全盛期を迎えた。常連の中で最も華やかな中心人物たちは「ボマレ女王」ことロジータ・ヤルジャン。セレスト・モガドル(本名ヴェナール)、リゴルボックことマルグリット・バデル、シカルことレヴェーク、ブリチャール、ブリディディことポール・ピストンらで、リゴルボックは1845年に発明されたカンカン踊りを踊った。第2帝政時代、入場料は男5フラン、女1フランだった。やがてこのホールも人気を失い1875年に閉店、1882年に取り壊されてしまう。

10) rue Neuve-des-Petits-Chomps : この町名は現存しない。現在の第1区と第2区を通っているダニエル・カザノヴァ街とプティ・シャン街に吸収されてしまった。1643年リシュリュー枢機卿の館を建設する時、クロワ・デ・プティ・シャン街とガイヨン街を結ぶ道路として建設されたので、プティ・シャン新道の意味でヌーヴ・デ・プティ・シャン街と呼ばれたが、1881年以降プティ・シャン街になった。1944年に第2次大戦時の抵抗派の英雄ダニエル・カザノヴァ(1909-1943)を記念して、この通りの西側部分を彼の名前にした。建設当時はぬかるみの低地で、舗装されず歩道もなかったので、豪邸が立ち並ぶようになって不潔な街だったという。残念ながら本文中のレストランの所番地は不明である。

11) Café Anglais : 第2区と第12区にわたるイタリアン大通り13番地にあった。ポール・シェヴルユーが開業したこの店は、ロマン主義時代のパリの上流社交界人士をひきつけた。中2階と2階につくられた22のサロンと個室にはパリのみならず外国の有名人も来店している。この建物は1913年に取り壊され、198平方メートルの空地は150万フランで売却された。第6区のコンティ河岸1番地にも1769年から同名のCafé Anglaisが営業しているが、お客はイギリスの雑誌や新聞を読むために来たという。

12) Gérard de Nerval, 本名 Gérard Labrunie (1808-1855) : 父エチエンヌがナポレオン軍団の軍医のため出征し、母マルグリットも同行したので、ヴァロワ地方のモルト・フォンテーヌに住む母方の大叔父に養育された。美しいヴァロワ地方の風景と大叔父から受けた自由主義と神秘主義の感化、夫と同行した母マルグリットがシレジアで病死したため生母の顔を一度も見ることがない故の母へ対する無限の憧憬、これらが彼の人生に深い影響を及ぼしている。負傷し退役して帰国した父に引き取られパリに上京、サン・マルタン街 72 番地に住み、シャルルマーニュ高等中学に入学し、此处でテオフィル・ゴーチエ (1811-1872) を知り、終生の友人となる。1832 年ドイツ文学に魅了されていた彼は『ファウスト』*Faust* 第 1 部を仏訳、作者ゲーテから絶賛された。またホフマンの影響から幻想的コントを創作した。処女詩集『ナポレオン及び戦うフランス』*Napoléon et France guerrière* (1826) を発表し文壇に登場、以後ゴーチエらと共にユゴーの親衛隊としてロマン派運動に参加していく。少年時代の憧れだった金髪の美少女アドリエヌ、悲恋に終わった女優ジェニー・コロン、そして亡き母の追想が、ネルヴァルの幻想的神秘的作品の女性像の本質を形成している。経済的にも健康にも恵まれず、精神病の発作に悩まされながらも、彼の発表した傑作は、その晩年の 5 年間に創作されたものである。『東方旅行記』*Voyage en Orient* (1851)、『幻視者たち』*Les Illuminés* (1852)、『ボヘミアの小さな城』*Petits Chateaux de Bohême* (1853)、巻末に『幻想詩集』*Les Chimères* を併収している『火の娘たち』*Les Filles du feu* (1854) などがそれである。後に来る象徴派、シュルレアリスム派、プルースト、ジロドゥーなどに深い影響を与えた。

13) ピエール・ガスカール著『ネルヴァルとその時代』(入沢康夫・橋本綱氏訳、筑摩書房、1894 年刊)によればポール・ニケの店には「夜の彷徨中の途中によく立寄った」(207 頁)と記してあるが、残念ながら屋号が書いてないので、正確な場所は不明。レ・アル近いか。

14) Eugène Sue (1804-1875) : 父が近衛連隊の軍医長だったので、彼も最初は軍医として勤務、後に船医となり、ギリシャ、エジプト、アジア、アメリカを旅行、父の遺産を相續し文学に専念することができた。船医時代の経験をもとに『海賊ケルノック』*Kernok le pirate* (1831) などの海洋冒険小説でデビュー、バイロンに心酔して上流社会の不倫な恋を描いた『マチルド』*Mathilde* (1841) などで最初の成功を手中した。所が突然フーリエやブルードンらの空想的社会主義に感化され、支配階級の道徳的腐敗と墮落を烈しく糾弾し、同時にその専政の下で貧困に苦しんでいる下層階級の悲惨と不幸に熱い

同情をこめて創作した『パリの秘密』*Les Mystères de Paris* (1842-43, 10 巻) で大ベスト・セラー作家となった。この作品は誕生したばかりの新聞小説の代表作となり、シュー自身をこの新ジャンルの開祖たらしめている。パリ市民は彼の作品に流れる素朴な正義感と弱きを助け強きを挫く一種の仁侠の精神を彼自身が持つものと信じ、自分たちの代弁者として立法議会に代議士に選出した (1850.4.28)。彼は極左のモンタニャール派に属し、1852 年 12 月 2 日のルイ・ナポレオンのクー・デタに抵抗した。ウージェニー皇后の名付子であった彼を皇帝は逮捕する気はなかったが、彼はすすんで逮捕され、逃げ隠れしなかった。このような潔い行動が一般大衆のハートをつかんだのである。

15) *Les Mystères de Paris* (1842-43, 全 10 巻) : 海洋冒険小説の開拓者の 1 人であるシューは、この作品で「社会小説」roman social の創始者の 1 人である、とサント・ブーヴは言っている。フランス大革命が提起し、1830 年の 7 月王政が放置し、1848 年の 2 月革命が再び取り上げた社会問題が、小説に登場してきた。貧富の差が増大した格差社会は早急な改革を必要としていた。シューはパリの貧民の生活の実態を知り、救援と改善を実感する。そしてこの大都会の底辺にうごめく犯罪者、娼婦、孤児などの悲惨さ、更に刑務所の苛酷な内情を見聞する。そして改革改善により先ずその恐るべき世界を活字し、広く一般社会に知らせるべきだ、と決意する。捨て子のため孤児院で成長した私生児であるこの小説の主人公は、16 歳になると孤児院から出されるが行く所がなく、「食人鬼」Ogresse と綽名される女の売春宿に拾われる。しかしその美貌と純真な心から「マリの花」Fleur-de-Marie と呼ばれ、またその声の優しさから「ながしの女歌手」Goualouse とも呼ばれ、婦婦の中でも一目置かれていた。彼女の実は父はルドルフ・ド・ジェロスタイン王子で、自分の相手の女サラが子供を産んで捨てた事を知り、王子があらゆる手段を使って我が子を探そうと決意する、という所からこの波瀾万丈の物語は始まる。この作品は連載小説という形式で「デバ」紙に発表されるや、読者は翌日を待ち切れなかったという。全国の読者に熱狂的に支持された成功により、シューは破格の原稿料を得た。場面転換の巧妙さ、スピーディーな筋の展開、魅力的な登場人物の活躍など、シューの才能を示しているが、文体や描写の粗雑などで、バルザックやサンドの作品には及ばないといわれる。だが、ユゴーがこの作品に刺激されて大作『レ・ミゼラブル』執筆にとりかかっているし、マルクスやエンゲルスは、シューの作品を世界最初のプロレタリア小説として評価しているという。

16) Charles-Angustin Sainte-Beuve (1804-1869) : 北仏のパ・ド・カレ県の港町ブー

ローヌ・シュル・メールに生まれた。早くして、父を失い、貧しい未亡人の母の手により育てられた。1818年パリに上京、シャルマーニュ高等中学で哲学や修辭学を学び、1823年から医学校に通い、生理学、解剖学などを学んだ。かくして堅実な古典的教養と実験と観察を基本とする科学的精神を函養する。1824年『グローブ』*Le Globe*紙の文芸欄を担当する事になり、1827年1月ユゴーの詩を批評した縁でロマン派のグループ「セナクル」le Cénacleに参加した。1828年7月19日、サント・ブーヴは最初の労作『16世紀フランス詩歌および演劇の歴史的・批評的展望』*Tableau historique et critique de la poésie française au XVI^e siècle*を公刊、プレイヤッド派の詩人とロマン派の詩人の類縁を論じ、ロマン派がルネサンス以来の国家的伝統の継承者であると称揚した。

彼は友人のユゴーらに触発され詩作に精励し3冊の詩集『ジョゼフ・ドロルムの生涯、詩および思想』*Vie, poésies et pensées de Joseph Delorme* (1829)、『慰め』*Les Consolations* (1830)、『八月の断想』*Pensées d'août* (1837)を出版した。青年の内心を吐露し、「魂の風景」を抒情的に詠唱した作品の醸し出す雰囲気は、ボードレールやヴェルレーヌに愛され受け継がれるが、詩集全体の文学的価値は、当時の詩人たち、ラマルチーヌ、ヴィニー、ユゴー、ミュッセらの作品には到底及ばなかった。明敏な批評家でもあったサント・ブーヴは自分の詩才に見切りをつけ、これ以後、批評家として文学活動に専念する決心をする。同じ頃に発表された彼の唯一の自伝的小説『愛欲』*Volupté* (1834)は親友ユゴーの妻アデルとの不倫の恋が描かれており、主人公の青年アモールの恋愛遍歴の心理小説である。世紀病に悩む主人公は、オーベルマン、ルネ、アドルフの弟分であり、ドミニックや『谷間の百合』*Le Lys dans la vallée*のフェリックス・ド・ヴァンドネスの兄貴分にあたるが、これらの兄弟に比較して精彩を抜き、小説としての面白さを作品から奪っているかにみえる。いずれにしろ、小説家としての才能もサント・ブーヴは不足していた。

かくして彼は自分に残された唯一道である文学の歴史的研究と批評に没頭する。1837年7月、彼は親友でローザンヌ大学の歴史学教授ジュスト・オリヴィエ (1807-1876)に招聘され同大学で出張講義を担当 (1837.10.-38.6.)、内容は一任されていたので、彼はそれまでほとんど忘却されていた17世紀のポール・ロワイヤル修道院の歴史とその人々を取り上げ、イエズス会との抗争からの受難の歴史とジャンセニズムの宗教史的意義を解説した。この講義は後に『ポール・ロワイヤル』*Port-Royal* (1840-59, 全5巻)の大作になった。彼はまた1848年ベルギーのリエージュ大学文学部に仏文学講師として招かれ連

續講義を行ったが、これは当時のロマン主義運動を取り上げ、その勃興から隆盛までの歴史を同時代人として検証している。これは後に『帝政時代におけるシャトブリアンとその文学的流派』*Chateaubriand et son groupe littéraire sous l'Empire* (1861, 全2巻)として発表される。この2度の外国出張は、ユゴー夫人の訣別と2月革命の動乱からの逃避が原因とされている。

1840年にマザラン図書館管理官、1844年3月14日には、カジミール・ドラヴィーニュの後任としてアカデミー・フランセーズ会員に選出された(得票21票)、同時にメリメがシャルル・ノディエの後任として選出された(得票19票)。因みにいずれも対立候補はヴィニーだった。この間彼は批評執筆に専念、『文学的批評と肖像』*Critiques et portraits littéraires* (1832-39, 全6巻)、『女性の肖像』*Portraits des femmes* (1844)、『現代作家の肖像』*Portraits contemporains* (1846,3巻)を出版し、批評の大家として不動の地位を占めるに至った。しかし彼の批評の集大成であり、最大の傑作は、1849年から『コンスタチュシヨネル』*Le Comstitutionnel* 紙に連載を開始した『月曜閑談』*Causeries du Lundi* と題する評論である。一時『モントゥール』*Le Moniteur* 紙、『ル・タン』*Le Temps* 紙へと変ったが、終生書き続けた。死後、續篇までいれて全28巻に及ぶこのシリーズは、歴史上のあらゆる興味ある人物を取り上げ、その生涯、人格、思想、作品を、気の張らない座談の形式で論じ、江湖の喝采を博した。明敏かつ軽快な名文によって綴られたこの評論は印象批評と後の科学的客観批評を見事に融合させ、人間精神の観察と心理分析の傑作となっている。

17) Laure de Saint-Martin Permon, duchesse d'Abrantesse (1785-1838) : ナポレオンに愛された将軍ダブランテス公爵アンドッシュ・ジュノー (1771-1813) と1800年に結婚した。夫ジュノー将軍は1807年ポルトガルのエストラマデーレ地方のアブランテスで勝利を得て、その功績により公爵位を授与されていた。夫が発狂して自殺し(1813.7.29.) さらにナポレオンが没落すると同時に彼女の生活環境も激変、生活のために自活しなければならなかった。彼女は文筆で生活の資を得ようとし、大革命時代から帝政を経て王政復古に至るまでの政財界の上流社会の興味溢れるエピソードと忌憚の無い人物評を織りませた『回想録』*Mémoires* 別題『ナポレオンに関する歴史的追想』*Souvenirs historiques sur Napoléon* を出版した。最初のうちこの著作は人々の注目の的になったが、故意か無意識か記述されている事柄に誤りや事実に反するものが多く散見され、資料的価値が低いのは残念である。ナポレオンも魅了され、皇帝も自分の名前ナポレオンを彼

女の息子（1807-1851）に与えている程の美女だった彼女には、バルザックやユゴーなども好意をを寄せていた。しかし性来の浪費癖は一生治らず、最後はバリのある屋根裏部屋で窮死し、葬式費用さえ無く、ルイ・フィリップの妃マリ・アメリーが恵んでやったという。彼女は多くの小説を書いたが駄作のみであった。

18) 彼が隠れ住んだ場所は、現在の第6区クール・ド・コムルス・サン・タンドレ2番地の家具付きホテルの「ホテル・ド・ルアン」の5階の2間の部屋である。村松嘉津氏によれば（前掲書『續巴里文学散歩』228頁）、「表構えは実に安っぽい。看板に「日極め月極め」などとしてあるから、ホテルというよりは下宿であろう。恐らくサント・ブーヴが住んだ頃と全く同じ様相なのだろうと想像される」とある。彼はこのホテルに1832年から41年まで住み、『愛欲』を書き、『ポール・ロワイヤル』に取りかかっていた。またユゴー夫人アデルと密会していたのもこのホテルである。

彼がそれまで住んでいたノートル・ダム・デ・シャン街19番地の家から密かに当時クール・デュ・コムルスと呼ばれていた小路のこの安ホテルに引っ越して来たのには訳がある。国民衛兵の義務を忌避するためだった。大革命から第2帝政末まで、一般市民の青壮年の男子は国民衛兵隊に入隊するのが義務で、制服を着て鉄砲をかつぎ、同じ町内の「八百屋やパン屋の亭主達と夜勤に出る」（村松嘉津、前掲書、228頁）ことになっていた。サント・ブーヴに限らず、詩人や文学者という人たちにとり、これはたまらない苦役だったろう。もしこの義務を果たさないと特設の獄舎に投獄されたのである。サント・ブーヴはなんとか国民衛兵の義務から逃れるため、移転先を知らせる事なくドロンをきめこんだのだ。同居していた母も別れてモンパルナス街に移転、彼宛の手紙は此処に回送してもらい、人にも母の所で会ったのである。ホテル・ド・ルアンの暮らしは約10年続くが、この屋根裏部屋は彼の貴重な仕事場になった。

19) Louis-Charles-Alfred de Musset (1810-1857)：バリのノワイエ街33番地、現在のサン・ジェルマン大通り75番地で、1810年12月11日に生まれ、リヴォリ街の横丁のアルジェ街に入って最初に左折したモン・タボー街6番地の家で、1857年5月2日に死んだミュッセは、パリのどまんなかで生まれて死んだ生粋のパリっ児といえる。上級官僚であった父も貴族出身の母も文学的素着のあった知識人で、6歳年上の兄ポール(1804-80)と10歳年下の妹エルミーヌ(1819-1905)の2人の兄妹に囲まれ、幸福な少年時代を送った。アドニスのように金髪の美少年で才気煥発な彼は家庭では大事に育てられた坊ちゃんだった。9歳の時名門のアンリ4世高等中学に入校、貴族やブルジョワの子弟と

友人になる。極めて優秀な生徒で、1827年17歳の時、公開コンクールでラテン詩部門で2等賞を得て卒業した。その後は就職と自立のため、法律、医学、音楽、デッサンなどで修得しようとするが、いずれも永つづきせず、医学生の時に初めて屍体解剖に立ち会った際は気絶したと伝えられている。このような体験を経てようやく彼は自分の天分を悟るに至った。詩人として生きること、文学創作に専念する事、本当の自己が活かされる方途だとミュッセは決心したのである。幸運にもアンリ4世校の同級生でユゴアの義弟にあたるポール・アンリ・フーシェ（1810-1875）に紹介され、ユゴアの主宰する文学グループ「セナクル」に参加する。彼はここでロマン派の詩人や作家たちと知り合うが、特にサント・ブーヴとは親友になった。この雰囲気刺激され、1830年1月9日詩集『スペイン・イタリア物語』*Conte d'Espagne et d'Italie* を出版する。15篇の作品が収録されたこの詩集は、詩人ミュッセの天分の萌芽がすべてみられる傑作だったが、その大胆な手法のため文壇の評価は余りたかくなかった。スペインとイタリアは当時のロマン派の詩人たちが偏愛していた情熱的風土だったので、ロマン派支持の青年たちはこの詩集を大歓迎した。彼の才能に注目したオデオン座の支配人は劇の新作を依頼、ミュッセはその求めに応じて『ヴェネチアの夜』*la Nuit vénétienne* を書き上げ、同年末の12月3日、オデオン座で上演した。所が開幕早々から烈しい弥次を浴び、無残な大失敗に終わった。彼の誇りと自尊心は大いに傷つけられたが、劇作への欲求は止み難く、無礼な観衆を必要としない読んで楽しむ劇作を書き続けた。これが1832年12月25日ランデュエル書店から出版される『肘掛椅子で見る芝居』*Spectacle dans un Fauteuil* である。

1833年6月24日、『両世界評論』主幹フランソワ・ビュロ（1803-1877）が「プロヴァンス兄弟軒で設けた宴席で、23歳のミュッセははじめて28歳のジョルジュ・サンドに逢った。2人の席は隣り合っていた... 2人の席を隣りあわせたのは、サンドの「良心の支配人」サント・ブーヴの計らいだったといわれる。」（小松清『世紀児の告白』（下）のあとがき、岩波文庫、1944年刊、188頁）。この会合が、19世紀の文壇の中でも最も有名な恋愛事件の発端となる。文壇きってのダンディと美しく若い未亡人は、手に手を取ってヴェネチアへ出発する（1833.12.12.）。翌34年4月10日、ミュッセが孤影悄然としてパリに帰国するまでの嵐のような激動の恋愛体験は、ミュッセを大詩人たらしめた苦悩と傷心の事件だった。彼はこの間の消息を自伝的小説『世紀児の告白』*La Confession d'un enfant du siècle*（1836）で描き、サンドは『彼女と彼』*Elle et lui*（1859）を書くが、彼女の作に反論すべくミュッセの兄ポールは『彼と彼女』*Lui et Elle*（1859）を発表する

のである。『5月の夜』*la Nuit de mai* で始まる「夜シリーズ」(1835-37) や『ラマルチヌへの手紙』*La Lettre à Lamartine* (1836), 『追憶』*Souvenir* (1841) は詩人としてのミュッセの傑作であり, また『マリアンヌの気紛れ』*Les Caprices de Marianne* (1833), 『ロレンザッチョ』*Lorenzaccio* (1834) などを始めとする劇作, 『喜劇とことわざ劇』*Comédies et Proverbes* (1840) などは大半が忘却されてしまったロマン派劇作品のなかでも独創的価値を持つ不朽の作品となっている。30歳以後はほとんど作品を出版せず, 廃人同様に見られ, かつての美しさはその金髪だけと蔑視冷遇されていたミュッセが, 突如として再び脚光を浴びたのが, 彼の短い1幕劇『気紛れ』*Un Caprice* (1837) がコメディエール・フランセーズ座で上演され, 大成功をおさめたのが発端だった(1847.11.27.)。それ以後, 彼の作品『シャンドリエ』*le Chandlie* (1835), 『マリアンヌの気紛れ』, 『何事も誓うなかれ』*Il ne faut jurer de rien* (1836) などが次から次へと上演され, ささやかな臨時収入を彼にもたらしたのである。1852年5月27日, アカデミー・フランセーズ会員に選出さ, 「不朽の人」の仲間入りを果すが, 当時の彼の境遇や肉体のやつれ様は衝撃的だったという。57年5月2日死去, 翌3日にベッドで死んでいるミュッセが発見されている。晩年は創作力も涸渇し, 病気に苦しみ, 孤独と悲哀に苛まれた日々だった。ペール・ラシェーズの墓地に埋葬されたが, 会葬者は僅か27名という淋しさだったという。しかし死後の彼は多くの人に哀惜され, 彼の墓前には現在でも供花が絶えない。また遺言通り1本の柳が植えられ, その影が墓石を優しく覆っており, 裏側の横手には老婦人の坐像の下に愛した妹のエルミーヌの眠っている墓がある。

20) Jean-Baptiste-Alphonse Karr (1808-1899) : 19歳でブルボン高等中学の教師になるが, この生活に馴染めず, 閑暇のうちに人生を送る事を夢想した。教師生活からの脱出をめざし, 1832年『菩提樹の下にて』*Sous les tilleuls* (1832) を発表, 好評を得, この縁で『フィガロ』*Le Figaro* 紙に入社, 1839年には編集長になった。この間にも創作活動を続け, 『金曜の夜』*Vendredi soir* (1835), 『ジュヌヴィエヴ』*Geneviève* (1838) などを発表し人気作家となり, 駅の売店でのベスト・セラー作家になった。しかしすべて駄作で文学的価値は無い。彼の真価は1839年に発刊した月刊(後に不定期になる)の小冊子『蜂』*Les Guêpes* で, 政財界の大物や, 文壇, 画壇, 音楽界の有名人や大物を独特の諷刺をきかせた皮肉な文章で槍玉にあげ洛陽の紙価を高めたのである(1839-49)。田園生活を愛していた彼はノルマンディーのサント・アドレスに別荘を購入しボート遊びや魚釣りを楽しみ, 実際に蜜蜂も飼っていた。1851年12月2日のルイ・ナポレオンのクー・

デタに反対しニースに移住し、サント・アデレスでの生活を再現した。『農園通信』*Lettres écrites de mon jardin* (1853), 『海辺にて』*Livre de bord* (1878-1880), 『川釣りと海釣り』*Pêche en eau douce et en eau salée* (1855)などを発表し、亡命志願者の優雅な余生を語っている。彼はノルマンディーに移転する前は、当時は田舎でパリの郊外だったモンマルトルやサン・トウアンで暫く暮らした。

21) George Sand, 本名 Aurore Dupin, baronne Dudevant (1804-1876)：ポーランド王フリードリッヒ・アウグスト2世(1670-1733)の庶子ヘルマン・モーリス・ド・サククス伯爵通称サククス元師(1696-1750)を祖父に持つ名門の家に生まれ、4歳の時に軍医の父モーリスを失い、祖母の屋敷のあるフランス中部ベリー地方のノアンに移住し、小作民の子供たちと自然の中で遊ぶ田園生活を満喫する。18歳の時、地主の田舎貴族カジミール・デュドヴァン男爵と結婚(1822.9.17.)、長男(1823.6.30.誕生)、長女ソランジュ(1828.9.13.誕生)を得るが、専制的で浮気な夫に愛想が尽き、パリに上京、新聞記者となり自活をし、その間作家のジュール・サンドー(1811-1883)と知り合い、ジュール・サンドの筆名で作品を共作『ローズとブランシュ』*Rose et Blanche*を発表(1831)するが(1831.12.17.)、翌年には独立し『アンディアナ』*Indiana*を発表(5.12.)、ジョルジュ・サンドを名乗る。主人公アンディアナの情熱的恋愛が虚栄心が強い不実な男性により裏切られていくこの小説は、サンドの不幸な結婚生活を反映した自伝的要素が強く、それだけ主人公の苦悩には白真力があり、ブルボン島という熱帯の自然のエクゾチスムの舞台効果と相対して、一躍サンドを人気作家に押し上げた。続いて発表した『ヴァランティヌ』*Valentine* (1832.11.17.)、『レリア』*Lélia* (1833.7.18.)をキリスト教に絶望しながらも、真実の愛を探求しようとする主人公の精神的苦闘を描き、大きな話題となった。実生活においてもサンドは恋多き女性で、その美貌と男装という破天荒なスタイルで注目され、作家たちと可成り放縦な交流を続けていた。『カルメン』*Carmen*の作者メリメ(1803-1870)との束の間のアヴァンチュールが終わり(4月末頃)、『レリア』出版の直前の6月24日初めてミュッセに会い、出版の直後の7月29日頃には彼の愛人になっていた。2人のヴェネチアの悲恋は前述の通りだが、サンドもミュッセと同様に、この恋愛により女性としてまた作家として成長する。彼女の恋愛はこの後天才を育てる母性愛ともいえるべき慈愛に昇華するのである。彼女の献身的な愛情と看護がなかったならば、ショパンの晩年の傑作は生まれなかったであろう、といわれている。

22) 5幕散文の史劇『アンリ3世とその宮廷』(1829年2月11日、コメディイーフラ

ンセーズ初演)で成功をおさめ、新進劇作家としてデビューしたデュマ・ペール(1802-1870)は『アントニー』(1831年5月3日、ポルト・サン・マルタン劇場初演)で大成功をおさめ、ロマン派演劇の大家としての地位を不動のものにした。莫大な収入を得るようになった彼は、性来の豪放磊落にして気前の良さから、惜しげもなく快樂のために浪費した。貧しい文学青年たちに恵んでやることもしばしばで、彼の所にはファンのみならず施しを期待する取り巻き連中も蟄集した。友人を歓待する事も大好きだった彼は、自宅でパーティーを開催し、社会各層の有名人が参加した。なかでも有名なパーティーは、1833年のカーニヴァルの時、彼が自宅で主催した仮装舞踏会である。自宅が4部屋しかなかったので、大家に交渉して隣りの空部屋を借り、装飾は当夜出席する作家たちの代表作の場面を新進画家たちが壁に描くという豪華さで、なかでもドラクロワがエミール・デジャンの訳詩『スペイン民謡』の戦闘場面をまたたく間に壁に描き上げて大喝采を浴びたという。当夜の出席者約700名余、ラファイエット將軍、音楽家のロッシーニ、画家のドラクロワ、ミュッセ、ジョルジュ嬢やボカージュらの名優たちなど、パリ社交界のあらゆる名士が顔をそろえたのである。バンドが2組演奏しダンスが始まりその晩を踊りあかし、翌朝午前9時にバンドを先頭に街頭に繰り出しギャロップを踊りながら、先頭が大通りに達しても、「その後尾の方はまだオルレアン小路の中庭をくねくねと踊っていたのである。」(アンドレ・モーロワ)：『アレクサンドル・デュマ』菊池映二氏訳、筑摩書房、1971年刊、108頁)。

オルレアン小路 Square d'Orléans は第11区のテブー街の横丁で小さな広場があり、6棟のアパートが建造され、有名人が入居した。ジョルジュ・サンドが5番地の2階に、すぐ近くの9番地にショパンが入居した(1842年秋)。その他グノーの岳父でコンセルヴァトワールのピアノ教授ジンメルマン、声楽家マリブランの妹ポーリーヌ・ヴィアルドなどがいる。デュマが3番目の愛人で女優のメラニー・セール、本名ベル・クレルサメルとユニヴェルシテ街25番地から此处に移転してきたのが、1832年の事だった。メラニーは前年の3月5日にデュマの子を産みマリ・アレクサンドリーヌと命名し、彼に認知させ、前の愛人で同じ名前の女優メラニー・ヴァルドールからデュマを奪って恋の勝利者になっていった。それだけに、彼女はデュマの妻として公認されるように努力し、この破天荒なカーニヴァルを取り仕切ったのである。

本文中にわざわざ Bleue ではなく Bleu だと記してある町名は、残念ながら見当たらず、rue Bleue が載ってる。第9区の街でフォーブール・ボワソニエール街67番地とラ・ファ

イエット街 72 番地を結ぶ長さ 250 米、最狭幅 10 米の道路である。この通りの 14 番地の家に、フランスの死刑執行人のサンソン一家が住んでおり、ルイ 16 世を処刑したシャルル・アンリ・サンソンはここで 1739 年に生まれている。

23) Bourse : 第 1 区コキリエール街 1 から 7 番地の土地に立っていたソワソン館の跡地に建設された建物で、はじめは「小麦取引所」La Halle aux Blés といい、小麦の他に穀物類の取引所だった。ラ・トヌリ街の取引所が手狭になったため此処に新築移転て来た (1754)。直径 68 米の円形の建物で、内部は直径 40 米あった。小麦や穀物を雨から守るため 1782 年 9 月から翌 1 月にかけ、直径 40 米の木製のドームが造築されたが、1802 年 10 月 16 日の火事で焼失、今度は鉄製のドームが 1811 年に新造された。しかしこのドームも 1854 年頃の火事でなくなり、現在の株式取引所のドームは 1887 年の建造であり、建物全体の完成式は 1899 年 9 月 24 日に挙行された。

24) Pierre-Fraçois Lacenaire (1800-1836) : ローマン県フランシュヴィル出身の大盗賊。商人の父は彼の少年時代は商売が順調だったので、彼を県都のリヨンの寄宿学校に入学させた。しかし学則を守らぬ彼は退学させられ、何度か転校をしてやっと高等中学を卒業する。商社、銀行、公証人役場などに務めるが何処も永続きしなかった。雇い主からあらぬ疑いをかけられて嫌気がさした彼はリヨンを去り、パリに上京する。上京して来た父と散歩している時にたまたまテロー広場に出て、そこに据えてあるギロチンを目撃した。その時父がステッキでギロチンを指し、生き方を変えないと、ここで死ぬことになるぞ、と言われたと彼は『回想録』*Mémoires, révélations et poésies de Lacenaire* (1836, 2 巻) の中で語っている。それ以後、ギロチンは彼の夢に何度もでてくるようになる。文学で身を立てようとするが、出版者や新聞社に送った作品はすべて返送され、絶望のうちに暮らしているうちに生活費に困窮、ルーレットで稼いだのも束の間、結局友人たちを鴨にした詐偽を働き犯罪者に転落していく。イタリア、スイス、ベルギーと各国を流浪してパリに舞い戻って来た時は立派な強盗殺人犯になっていた。プロの盗賊になるための手本は、盗賊から警察の密偵となったフランソワ・ウジェーヌ・ヴィドック (1775-1857) の『回想録』*Mémoires* (1828) だった。彼はこの著書から良き仲間がなければ大仕事は出来ない事と、盗みはこのもったいぶった偽善社会への反撃であるという大義名分を得た。その後も彼は犯行を重ねるが、天網恢恢、1835 年 1 月 10 日 2 人の共犯者と共に逮捕される。法廷に出頭した彼は冷静かつ雄弁に自分の行為は犯罪という形をとった社会の浄化と矯正行動なる旨を述べ、流麗上品な言葉遣いと優雅な態度で傍聴人を魅了した。また彼のダンディ

振りと美貌が特に若い女性の興味と関心の的になった。彼は判決の出るまで自分の独房で一種のサロンを開き、作家や新聞記者などと歓談し、自分の人生の事件を語っている。翌36年1月8日、死刑の判決を受けたラスネールは足取りも軽くギロチンに昇り、微笑を浮かべながら、ギロチンの刃の下に首をさしのべたという。

25) théâtre Bobino : 第14区のラ・ゲテ街20番地にあったダンスもできるレストランが1868年にボビノ劇場になった。人気のある古典音楽が主の音楽喫茶だったが、やがて歌ばかりでなく、ヴォードヴィル、オペレッタ、レヴィューも上演するようになり人気を博した。やがて劇場はフォリー・ボビノ劇場と改名、つぎにボビノ・ミュージック・ホールとなりパリ市民から愛好された。この劇場の前身は第4区ダダム街63番地にあったリュサンプール劇場で、入り口はフルリュス街にあった。最初の頃、客寄せのパレードをしていたが、この楽隊の指揮者がボビノと綽名された人物でそのため、この劇場はボビノ劇場とも呼ばれた。ヴォードヴィルの他にパントマイムや剣劇なども上演していたが、1862年に開場したクルニー劇場との競演で苦勞していた。しかし都市整理計画により、1868年に取り壊され、前述のラ・ゲテ街へ移転した。

26) La Grande Chaumière : 第5区から第6区を経て第15区に至るモンパルナス大通りの112番地から136番地にあった一般庶民のためのダンス場で、1778年から1853年頃まで隆盛をきわめ、ティヴォリ、マピーユ、イタリヤなどのダンス場のライヴァルだった。最初は菓屋根の小さな東屋が幾棟か散在し、そこで飲んだりダンスをしたりした。1783年にイギリス人のティクソンなる人物が何人かの共同経営者の協力で3階建ての建物を新築、周囲の広い庭園に、立木、花壇、洞窟、ブランコなどをつくり、1814年には射撃場も造成した。ティヴォリやボージュンより小規模だったが、すぐさまパリの新名所になった。やがてジェット・コースターも設置され、1837年には新経営者で擲弾兵上りのライル「新爺」が警察と交渉して警官の巡察を中止させる事に成功、お蔭で常に起こっていた学生仲間との喧嘩口論が無くなった。1845年に初めてポルカが紹介され、ついでより大胆な「カンカン」が出現したのもこのダンス場である。当時の有名な舞姫ローラ・モンテスも踊りにきている。またジュール・ファーヴル、オーラス・ヴェルネ、ポール・ド・コック、エミール・ド・ジラルダン、サン・シモン、ティエールらやがて政界、新聞界、文壇、画壇で活躍する人たちが学生時代、さかんにここに通った。入場料は木曜が2フラン、土・日曜が1フラン、他の日は50サンチームだった。しかしクローズリ・デ・リラに取って代られ、1855年に閉場した。

27) Henri Murger (1822-1861) : パリに生れで、パリで暮らし、パリで死んだ生粋のパリっ娘だが、父はサヴォワ出身の門番だった。作家でパリ市長やルーヴル美術館長にもなったエチエンヌ・ド・ジュイ (1764-1846) の紹介でロシアの外交官トルストイ伯爵の秘書になった。しかし 1838 年文学を志して勘当され、文学青年や学生たちの仲間になる。「水のみ会」*Société des Buveurs d'eau* を結成、詩や童話を創作し雑誌に発表した。赤貧洗うがごとき毎日であった。酒と煙草とコーヒーの暴飲で、30 歳の彼はすでに健康を害し廃人同様だったという。1849 年『コルセール』*Le Corsaire* 紙に発表した『ボエーム生活の情景』*Scène de la vie de Bohême* で一躍有名になった。7 月王政時代、ロマン主義にかぶれてカルチュ・ラタンに巣くう文学青年や画学生の貧しいけれども夢多い青春を、パリの下町娘の純愛をからめて描いたこの作品は、微笑と感傷と甘い涙と苦い失恋の、いくなれば世俗生活を越えた次元で展開される若者たちの姿を活写して、当時の読者に新鮮な感動を与えたのである。この小説はテオドール・バリエール (1823-1877) が 5 幕散文喜劇に脚色、ヴァリエテ座で公演し大成功を博し (1851)、この興行収入で赤字続きのこの劇場が立ち直ったといわれる。翌年はコメディ・フランセーズでも上演された。プッチーニ作曲のオペラ『ラ・ボエーム』は 1896 年にトリノで初演、フランスではオペラ・コミック座で 1898 年に上演されるが、これもミュルジュールの『ボエーム生活の情景』を原作としている。文名を得た彼は、小説のモデルにしたボヘミアンの青年たちに囲まれ、パリの夜のカフェやビヤホールに君臨、成功の余韻を楽しむのである。『両世界評論』などに寄稿し、その後も何篇の小説を発表するが、遂に処女作を超えるものはなかった。デュボワ施療院で死んだ時は何一つ持っていなかった。しかしその葬儀は盛大でサント・ブーヴをはじめ、文壇、芸能界、政財界の名士が参列、立派な墓を贈与している。そんな立派な墓をつくるなら、その金を前貸ししてくれ、とミュルジュールは叫ぶだろう、と彼と 9 ヶ月同居していたシャンフルリー (1821-1889) は記している。ロシア側からの暗示で、彼が秘密警察に関与していたのではないか、という疑問が払拭できないため、彼を詩人としてはミュッセの隣人、ネルヴァルの赤貧の友、インテリの落伍者としてのヴァレスの仲間と言う感動的かつ庶民的正当な記憶を残せないのである。

28) Gustave Courbet (1819-1877) : オルレアンに生まれ、パリに上京しほとんど独学で修業、1844 年のサロンに入選した「オダリスク」*l'Odalisque* で認められ、オランダに行きレンブラントらフランドル派の影響を受け、リアリズムの大家として一世を風靡した。社会主義的思想にも影響を受け、芸術もより民主的庶民的でなければならないと信じた。

1848年以降、プルドン、シャンフルリー、ボードレールと交友、今日ルーヴル美術館に展示されている「画室」*l'Atelier*の画面に、シャンフルリーとボードレールを描いている。政治にも関心を持ち、パリ・コミューヌに参加、新政府の美術長官に就任したため、ヴァンドーム広場の円柱の破壊の責任者として追求される羽目に陥ちる。円柱撤去の請願書を彼の名前で政府に提出したためである。このため1871年に6か月禁錮の判決を受け投獄されるが、病気のため釈放された。73年に円柱再建の政府決定がなされ、クールベの財産没収が強行されたため、破産した彼はスイスに亡命した。その地では、動物や風景や花などの静物画を描いて暮し、77年12月31日、58歳で亡命先のラ・トゥール・ベルスで死去した。クールベはボードレールの肖像もスケッチしているが、紫苑の花束を盛った花瓶の静物画「紫苑の花束」*Bouquet d' Asters*を献呈している。コミューヌの同志としても彼は『悪の華』の詩人を愛していたのであろう。

29) Café Momus：パリ第1区ルーヴル美術館の前にあるサン・ジェルマン・ロクセロワ教会の脇道のプレートル・サン・ジェルマン・ロクセロワ街の19番地の家の1階に、1841年に開業した。モミュは経営者である。この店は当時のインテリやボヘミアンの集會場で、シャトーブリアン、カジミール・ペリエ、バンジャマン・コンスタン、バルザック、ユゴー、サント・ブーヴ、レミュザ、ジラルダン、ジュール・シモン、テヌ、ルナン、ミュルジュールらが顔をみせた。この場所は後に『デバ』紙が買い取る。

30) 1847年11月27日、コメディ・フランセーズ座で、アラン夫人によって演じられたミュッセ作の『気紛れ』の予想外の大成功が、長い間忘却されていたミュッセという詩人と彼の作品を再び脚光を浴びせたのである。その意味で文学の神様も正に『気紛れ』であるといえよう。

アラン夫人(1809頃-1856)はLouise Despréauxといい、1831年から37年までジムナーズ劇場で娘役で出演、同じ俳優のアランと結婚、Luguet一座に夫婦で参加、巡業先のロシアのサンクトペテルブルグで大成功をおさめた。露都滞在中に他の劇場でも成功している芝居があると聞き、それを見物して、ロシア語のその脚本の原作がミュッセの『気紛れ』だったのを知った。帰国した彼女は、この作品を上演し大成功を獲得し、ミュッセ劇の復興を実現したのである。幅広い芸域を持つ彼女は多彩な役を演じたが、当たり役は『気紛れ』のド・レリ夫人、同じくミュッセの『戸は開け、しからずば閉じよ』*Il faut qu'une porte soit ouverte ou fermée* (1845)の伯爵夫人などがあげられよう。

31) M^{me} Rachel, 本名 Elizabeth Félix (1820-1858)：悲劇女優。スイスのアルゴヴィ

県ムンブフ生まれ。ユダヤ系の貧しい行商人だった父に連れられて各地を放浪、家計の足しに少女の頃から町のカフェや広場で歌っていた。1830年頃、パリの街頭で歌っている時に音楽評論家エチエンヌ・ショロン（1772-1834）にスカウトされ、本格的な音楽家をめざすが、声が朗唱にむいているとされ女優に転向、サン・トレールとサムソンの指導を受け、1837年4月24日、16歳の時にジムナーズ劇場で上演されたヴォードヴィル『ヴェンデの女』*La Vendéenne*でデビューした。少し後にコメディール・フランセーズの一人になり、コルネイユ作『オラス』のカミーユ役で、フランス座の初舞台を踏んだ。1838年6月12日のことである。彼女によってロマン派演劇の前で没落寸前だった古典派演劇が復活する。コルネイユ、ラシーヌ、ヴォルテールらの作品の主人公を演じて絶賛を博し、名女優としてフランス演劇界に君臨したのである。古典派演劇の他にもスクリーヴとルグーヴ共作の『アドリエヌ・ルクールール』*Adrienne Lecouvreur*でも大成功をおさめた（1849）。ヨーロッパ各国、ロシア、アメリカへも巡回公演をして、何処でも華々しい成功を手中にしたが、1885年に肺病にかかり翌56年に引退、療養の甲斐もなく、58年1月3日、僅か38歳で病死した。モンマルトル墓地への葬列は押し寄せるファンの大群ですさまじい混雑だったという。

32) ラシェルほとんどの古典劇の主人公を演じているが、カミーユはユルネイユ作『オラス』の、エルミオーヌはラシーヌ作『アンドロマック』の、フェードルは同じラシーヌの同名の劇作のそれぞれヒロインである。その他ラシーヌ作『イフィジニー』のエルフィル、同じ作者の『ミトリダート』のモニームなどがある。

33) Théophile Gautier (1811-1872)：フランスの詩人、小説家。画家を志したが詩作にも熱中し中学時代からの学友ネルヴァルの紹介でユゴーを知り、ロマン派文芸運動に参加、ユゴーの『エルナニ』の上演の時（1830.2.27.）、親衛隊のリーダーとして活躍、赤チョッキの伝説の主となる。その後は画業を断念し、多くの新聞雑誌に作品を発表して作家に転身した。処女詩集『初期詩集』*Premières Poésies*（1830）、『アルベルチュス』*Albertus*（1832）、から『螺鈿七宝集』*Emaux et Camées*（1852）まで詩作に精進した。また小説では『モーパン嬢』*Mademoiselle de Maupim*（1835）、『ミイラ物語』*Roman de Ia momie*（1858）、『キャプテン・フラカス』*Le Capitaine Fracasse*（1863）などを世に問うた。彼ははやくから文学の本質は何かという根本的な問題に関心を持ち、『モーパン嬢』の序文で、芸術はあらゆる有用性から独立し、政治信条や人道主義的効用、哲学的観念や感傷性を排し、芸術は美のためにこそ存在するという芸術至上主義を主張した。また最後

の詩集『螺鈿七宝集』では、芸術の本質は形式の美に宿るとして、詩で絵画的彫刻的美を再現すべしと述べ、絵画の美を詩に置換する「芸術の転換」を説いた。完璧な芸術をもって洗練琢磨した「ダイヤモンドの言葉」で音楽性豊かな詩句を稀有な韻律で歌い上げる事、これこそが詩人ゴーチエの目指したものである。この影響はボードレールを経て高踏派に及んでいる。だが彼の小説にみられる幻想怪奇趣味、エクゾシズム、伝奇的題材の扱いは、やはりロマン派作家の一面をうかがわせる。死後出版された『ロマン派の歴史』*L'Histoire du romantisme* (1874) は『エルナニ』合戦の前後の文壇の消息や交友関係を回顧したゴーチエの青春の記録で、楽しい物語でもある

34) Maria Taglioni (1804-1884) Filippo Taglioni (1777-1871) はミラノ生まれの有名な舞踊家で 1799 年にパリに来了後ストックホルムやワルシャワなどでバレエ教師をした。ストックホルム生まれの彼女も父と共に巡業、1822 年ウィーンでデビュー、父の創作したロマン派バレエ最初の傑作『ラ・シルフィード』*La Sylphide* (1832) をオペラ座で踊り (1832.3.12.)、トー・ダンスの天使のようなテクニックでロマン派の観客を魅了した。彼女が身につけていた軽快で透き通る薄物の衣装も革命的で、今日のバレエ衣裳チュチュの原型となった。これ以後も父の創作したバレエ『ダニューブの娘』*La Fille du Danube* (1836) や『影』*L'Ombre* (1839) などを演じ、大成功を博した。1835 年 Gilbert de Voisin 伯爵と結婚、1847 年に引退した。

35) Carlotta Grisi (1819-1899) : ミラノのスカラ座でデビュー、1841 年パリのオペラ座に参加、ゴーチエ原作の『ジゼル』*Giselle* (1841) を、次に同じ作者の『妖精ラ・ペリ』*La Péri* 演じ絶賛を博した。完璧なテクニックと共に魅力的なつつましい優美さで彼女は、ロマン派バレエを演じ、タグリオーニ、エルスレルと共にヨーロッパ舞踊界の 3 羽鳥といわれた。ロンドンやサンクトペテルスブルグでも公演して成功したが、35 歳で惜しまれつつ引退した。なお彼女の従姉ギリア・グリジ (1811-1869) も有名な歌姫。

36) Fanny Ellseker (1810-1884) : 本名 Franziska。オーストリー出身のダンサーでタグリオーニのライヴァルとされた。彼女もゴーチエの熱狂を引き起こしている。彼女もパリのペラ座で成功した後、ヨーロッパを巡演、特にその官能的魅力で観衆を熱狂させた。得意の作品は『びっこの悪魔』*Le Diable Boiteux* (1836)、『ジプシー』*Gipsy* (1839) である。本文では Essler とあるが、誤りである。

37) Maria Félicita Malibran, 通称 La Malibran (1808-1836) : スペインの歌姫。父 Manuel Garcia (1775-1832) もテノールの歌手で作曲家だが、妹の Paulime Viardot

(1821-1910) も歌手で作曲家だった。ロンドンで『セヴィーリアの理髪師』*Barbier de Séville* でデビュー (1825)、輝かしい成功をおさめ、翌 26 年に銀行家マリブランと結婚するが 1 年で離婚した。1828 年に上京イタリア座に出演、ロッシーニのオペラではソプラノとコントラルトの 2 つの声で歌った。彼女は俳優としても勝れていた。ヨーロッパとアメリカ公演も熱狂的に迎えられた。ベルギーのヴァヨリニストのシャルル・ド・ベリオと結婚したがその直後に落馬事故で急死した。彼女の死を悼んでミュッセは『マリブランに捧ぐスタンス』*Stance à la Malibran* (1836) を書いた。

38) L' Opéra-Comique : 第 2 区ボワルディュー広場にあった。この広場は 1780 年に造成された時はイタリアン広場と呼ばれたが (1852 年まで)、その後音楽家フランソワ・アドリアン・ボワルディュー (1755-1834) の名をつけられた。この土地に 1706 年頃実業家ピエール・コロザが豪邸をたて、これが相続や転売を経てショワズール公爵 (1719-1785) の所有となった。彼が失脚し破産した時、彼に世話になっていた微税請負人ラボルドなる人物が、広大なこの邸の敷地に道を造成し分譲するように提案、その時に出来たアンボワーズ、サン・マルク、ファヴァール、マリヴォーの新道にボワルディュー広場がつけ加わったのである。公爵はラボルドが世話してくれた近くのドルオ街 3 番地の美邸に移転し、また分譲がうまくいき破産から立ち直った。

コメディー・イタリアン一座のための劇場ファヴァール・ホール *Salle Favart* が 1781 年から 83 年にかけて建築されるが、土地を 30 万リーヴルで一座に譲渡してくれた公爵の好意に報いるため、一座は舞台右側のボックス座を無期限に無料で提供した。1783 年 4 月 28 日に開場した劇場には、1 年ほどオペラ座が間借りした事があるが、1838 年 1 月 13 日夜半の失火で焼失した。しかしオペラ・コミック一座を迎えるためすぐに再建され、1840 年 5 月 16 日に開場できた。168 席ある 1 等のボックス席は 6 フラン、80 列ある階段席は 1 フランだった。所がこの劇場も 1887 年 5 月 25 日に『ミニョン』*Mignon* の第一幕を上演中に出火、多数の死傷者をだす惨事となった。新劇場は 1894 年 6 月開始、1898 年に完成した。正面玄関は 3 つの前扉をもつ、2 階にも 3 つの高い窓を円柱が縁取っている堂々たる建物である。ホールの広さはオデオン座より広く (16.5 米)、奥行きはフランス座よりも深く (17.5 米)、舞台の広さは焼失前の劇場と同じだった (横縦 17 米と 18 米)。

39) *Zampa* : Ferdinand Hérold (1791-1833) 作曲、Anne-Honoré-Joseph、通称 Duveyrier Melesville (1787-1865) 作詞の 3 幕のヴォードヴィールで、1831 年 5 月 3 日、オペラ・コミック座で初演。主人公ザンパはナポリとシシリー全土の恐怖の的である海賊

の首領だが、実はモンテーザ伯爵の嫡男である。弟のアルホンスはナポリ王国副王に仕える軍人だが、この兄の事は知らず、逮捕命令を受けている。彼が許嫁のカミーユとの婚礼の夜、城を訪れた騎馬隊に拉致されてしまう。アルホンスが姿を消した大広間にザンパが登場しカミーユに彼女の父からの手紙を渡す。その手紙には海賊に捕われてしまった自分を救出するため、この手紙を持参した者のすべての要求を受諾するように、と書いてあった。ここからザンパとカミーユの結婚までの物語とこの大広間に飾ってある不幸な失恋で自殺した乙女アリアーヌの大理石像の奇怪な横槍の行為が織りこまれてこのヴォードヴィルが展開する。コーラス、独唱のセレナード、ヴェネチアのゴンドラの船唄などが美しく、観衆を魅了して大成功をおさめ、何度も上演された。

40) ドニゼッティ作曲の3幕物の喜歌劇『ドン・パスカーレ』は、1843年1月4日、以前はヴァンタドゥール・ホールと呼ばれ、1841年から70年までコメディイ・イタリヤン一座が独占使用していたためイタリヤン劇場とよばれていた劇場で上演されている。テキストのブッフ座はあやまりである。

Gaetano Donizetti (1797-1848) はイタリヤのベルガモに生まれ、ボローニャでマティに学び、後にロッシニ (1792-1868) の影響を受け、美しい旋律と声楽技法を自在に駆使した清朗な基調の歌劇約70篇を作曲し、ベルニーニ (1801-1835) と競い合い19世紀ヨーロッパの音楽の巨匠の一人となった。1839年パリに上京、ヴァンタドゥール・ホールで指揮をとり、彼の最高傑作3曲、『部隊の娘』*La Fille du Régiment* (1840)、『愛妾』*La Favorite* (1840)、『ドン・パスカーレ』*Don Pasquale* を上演した。イタリヤ、フランス、ドイツの間を往復し、各地で成功し、ナポリ音楽院長 (1838)、ウイーンの宮中礼拝堂音楽主任なども務めたが、晩年は精神を痛み、1848年4月8日狂死した。他に『ルチア・デ・ラマムーア』*Lucia di Lammermor* (1835) などの作品がある。

『ドン・パスカーレ』はドニゼッティ作の3幕喜歌劇で、1843年1月4日イタリヤン劇場で、次いで1864年9月9日にリリック座 Théâtre-Lyrique で再演され、いずれも大成功を博した。これは Pavesi 作の *Ser Marc Antonio* をお手本にしている (1813.7.10. 初演)。テーマは通俗的で老人の結婚である。裕福な老人ドン・パスカーレは若い女性との結婚を願っている。友人の医師マラテスタの忠告に耳を藉さないで、彼は自分の妹で修道院で成長した純情な娘ノリナを紹介する。しかし彼女は策略に富んだ若い未亡人で、ドン・パスカーレの甥エルネストの愛人だった。見合いの席でノリナの淑やかな優雅さに魅了されたドン・パスカーレは結婚を熱望し、マラテスタは2人の挙式の準備にとりかか

る。婚約が成立するや、ノリナは本性をあらわし、糸目をつけず買い物に熱中し大散財を始める。それに仰天したドン・パスカーレが一言注意すると、平手打ちをくらう破目になる。地獄のような結婚生活を覚悟して絶望に落ちたドン・パスカーレは、結婚契約もそれを作成した公証人も実は偽者である事が判明、ノリナとの結婚契約は無効となり、ノリナを甥に押しつけ自由になり、喜びを爆発させるのだった。ノリナを演じたのがカルロッタ・グリジである。ノリナと医師の第1幕の2重唱、第2幕最終場面の4重唱、第3章の平手打の場面の2重唱と優美なセレナーデが特にパリのファンを魅了した。

41) Antoine Louis Prosper, 通称 Frédérick Lemaitre (1800-1876) : コンセルヴァトワールを卒業し、1823年にアンビギュ・コミック座に入り、『アドレの宿』のロベール・マケールを演じ、大胆不敵なこの盗賊を舞台上に出現させ、一躍有名になる。コメディーフランセーズを除くほとんどの劇場に出演、シェイクスピア劇（『ハムレット』）からロマン派演劇（『リュイ・ブラス』など）、メロドラマ（『30年』など）まで多くの主演を演じた大衆演劇のタルマと綽名された。デュマは彼のために『キーン』 *Kean* (1836) を捧げている。彼は特にユゴー作品に出演、その堂々たる体躯と見事な演技力でロマン派演劇の興隆に貢献した。死の前年まで活躍し、1876年1月26日喉頭癌で死去した。『回想』 *Souvenirs* (1879) がある。

42) *L'Auberge des Adrets* : バンジャマン・アンチェ (1787-1870)、ラコスト・サンタマン (1797-1885)、ポリアント3人による共作の3幕のメロドラマ。1823年7月2日、アンビギュ・コミック座初演。32年1月28日、ポルト・サン・マルタン産で再演。当時ほとんど無名のフレデリック・ルメートルは悲劇役者を断念してオデオン座をやめ、メロドラマの悪役に自分の未来を賭けてみようとしていた時、幸運な偶然により、ロベール・マケールの役にありついた。

劇はグルノーブルからシャンブレーへ行く街道にあるアドレー家の経営する宿屋を舞台に展開する。有徳の宿の主人デュモンの養子で養父と同じく真面目な青年シャルルが、これまた有徳なジュールメーユの娘で貞淑なクレマンチヌとの結婚を明日に控え、その準備に大忙しである場面から始まる。花嫁の父から花婿に12,000フランという巨額な持参金が贈られる事は誰も知っていた。クレマンチヌが父に連れられ宿に到着した時、同じく宿に着いた2人の旅人がいた。彼らはレモンとベルトランと名乗ったが、レモンこと実はロベール・マケールで、2人はリヨン刑務所からの脱走犯だった。腹の空いている2人は早速食卓に就くが、ある任務を帯びいる者だと自称するけれども、服装や動作でそれ

となく正体をにおわせてしまう。食事中の雑談で、レモンは18年前に結婚した事があるが、その女を棄ててそれきり会っていないとベルトランに打明ける。その時、街道で行き倒れになっていた女が担ぎこまれるが、それがなんと彼が棄てた女のマリだった。幸いロベールは目に膏薬を貼っていて人相が変わっていたので、元気を取り戻したマリに気づかれず済む... 持参金を知った2人の悪党がジェルメーヌを殺して大金を盗むが、来合せた憲兵たちに逮捕され取調べの結果、マリとロベールの間にできた子が花婿のシャルルである事が判明、正体を暴露されて怒ったベルトランにロベールはピストルで射たる。瀕死の床でこれまでの自分の罪を告白し許しを求めてロベールは死ぬのである。

ルメートルが演じたロベールはもはや従来の伝統的な紋切型の悪役ではない。凶暴な目付きもしておらず、囁れ声でもなく、観客に不安を与える動作などはしない。この悪漢は紳士であり、常に愛想が良く明朗である。大胆で独創性に富んだこのような特性は、19世紀の喜劇に驚くべき萌芽を寄与した。

43) *Robert Macaire* : 『アドレの宿』が大好評だったので、その主人公マケールを復活させ再びベルトランとコンビを組み活躍させる續篇が、アンチエとルメートルの合作で、3幕散文喜劇としてフォリ・ドラマチック座で1834年6月14日に初演される(EC版ユゴー全集第5巻の注ではポルト・サン・マルタン座)。テオフィル・ゴージェは、この作品こそ7月革命に續く革命的芸術の偉大な勝利だと評し、ロベールを演じたルメートルは完全にシェイクスピア的喜劇のジャンルを創造した、と絶賛している。従来の悪漢像を一新、メフィストフェレス的冷酷な悪意から隔絶した驚くべき陽気さと哄笑と諧謔を持ち、悪徳と犯罪の貴族とも言うべき優雅さと柔軟性を体現している革新的悪役が誕生した、と結んでいる。ロベールとベルトランは犯罪人のドン・キホーテとサンチョ・パンサである。それまで余りぱっとしなかったルメートルはこのロベール役で一躍名優として脚光を浴びることになった。

44) *Jean Gaspard Baptiste Debureau* (1796-1846) : ボヘミアのコラン出身。父と兄妹4人の小さな軽業一座で巡業し、パリに上京、1817年フェナンビュール座の創立者で支配人ベルトランに認められ契約、この劇場に出演する事になる。コメディ・デ・ラルテのメンバーだったピエロを演じたが、単なる道化役でなく、人間の情念のあらゆる変化と陰影を微妙で深みのある感傷と共にパントマイムで表現し、従来のピエロ像を斬新発展させた。

45) *théâtre des Funambules* : タンプル大通りの劇場街の中にこの劇場が開場した

1816年頃は道化師やピエロが人気があった。1830年にはアルルカンが主役の滑稽劇やパントマイムで出し物を組んだが、更にヴォードヴィルもつけ加えた。ドビュローやルメートルがデビューを果したのもこの時である。なかでもドビュロー扮するピエロは絶賛を博し、ピエロ芸の典型を創作したのである。彼の息子シャルル（1829-1873）も父の跡を継ぎピエロ芸の近代的スタイルをつくった。ドビュローは惜しまれつつ1846年6月17日、50歳で死去した。この劇場は780座席で、入場料は0.25フランから1.5フランまで、大衆のため廉価であった。

46) *quais des Célestins* : 第6区にあり、シュリ橋とマリ橋を結ぶ長さ400米、幅28米から30米の道路。1352年に創立されたセレストン修道院から命名されたこの河岸の完成は1868年で、オルム河岸とサン・ポール河岸を吸収統合した。

47) *boulevard du Crime* : *boulevard du Temple* の別称。多くの劇場が立ち並ぶ繁華街で、喜劇、悲劇の他に血みどろの惨劇や、犯罪劇のメロドラマが盛んに上演され観客を魅了して、犯罪大通りの異名をつけられた。

48) 1848年2月24日、ルイ・フィリップの退位により臨時政府がブルボン宮と市庁舎で同時に成立する。ブルボン宮にいたラマルチヌ、ルドリュエーロランらは市庁舎に駆けつけ、ルイ・ブランやアルベールらの社会主義者と協議し、合同団結して唯一の統一政府を樹立する話し合いが付き、第2共和政府が発足する。この翌日、労働者たちが赤旗を国旗とする要求に屈せず、これまでの歴史と栄光を説いてラマルチヌが三色旗を国旗にした逸話は有名である。

49) *Les vésuviennes* : *Borme fils* という市民により組織された軍隊的娘子軍とも言うべき団体で、15歳から30歳までの女性が隊員。彼女たちはベルヴィルに設営された共同体で生活し、月10フランが支給された。長ズボンをはき、肩章のついた長上衣を着て、庇のある帽子をかぶり、颯爽と隊列を組んで行進したので、何時も野次馬がついてまわった。彼女たちは武器の操作も上手で、労働部隊、酒保要員、看護士部門の3隊に編成されていた。

1848年3月24日、彼女たちは市庁舎に赴き、整然と秩序を保ちながら、投票権、結婚の義務、夫の家事分担を要求している。ヴェスヴィアス火山の女たち、という意味のこの言葉の真意は不明だが、女権論者の一派か。

50) *Chant du Départ* : 大革命時代、人々の革命意識と愛国心を発揚するため多くの革命歌がつけられたが、この歌は第2のラ・マルセイエーズと呼ばれる程の人気を博した。

作詞は詩人アンドレ・シェニエ（1762-1794）の弟で同じく詩人で劇作家のマリ・ジョゼフ・ブレーズ・シェニエ（1764-1811）で作曲は当時多くの愛国歌を作曲していたエチエンヌ・ニコラ・メユール（1763-1817）である。シェニエがこの詩をメユールに読んで聞かせた所、是非とも自分に作曲させてくれと懇願されたという。この歌はバスチユ占領を記念する第5回革命記念日の1794年7月14日に発表され、忽ち全国に広がって愛唱された。ナポレオンは革命的内容のため禁止し、王政復古時代は歌詞が書き換えられた。歌は全7節で、それぞれタイトルがついている。本文中の歌詞の本歌を探してみたが、第1節「代議士」*Un député du peuple*の次のものかと思われる。

Tremblez, ennemie de la France,
Roi ivre de sang et d'orgueil,
Le peuple souverain s'avance;
Tyrans, descendez au cercueil !

51) le petroleuses：パリ・コミューンの時、ヴェルサイユ政府軍に火炎瓶をなげて抵抗したコミューン派の女性たち。彼女たちはコミューンが鎮圧された後も放火というゲリラ戦的テロを実行した。後に過激派の女性闘士を指すようになる。

52) arbres de la Liberté：フランス大革命初頭、市町村の広場に植樹して、その木が新制度と共に成長するのを見守ろうとする風習が生じた。フランス中部ヴィエンヌ県の司祭により1790年に植樹されたのが最初といわれ、1793年頃には既にフランス全土で6万本が植樹されたという。以後、1830年の7月革命、1848年の2月革命の時も、自由の木の植樹が実地されたが、2月革命の際の自由の木は、1850年から52年にかけてほとんどが切り倒された。

53) L'Obélisque de la place de la Concorde：ルイ15世の病気回復を祝して、パリ市長らが発起人となり建設されたルイ15世広場は、時代と共にその名を変え、最終的に現在の名になったのは1830年のことである。大革命時代にギロチンが設置され、ルイ16世をはじめ多くの人々を処刑した記憶を消すため、国民和合concordeを願って命名されたのが、現在の名である。

1792年8月11日、広場に立っていたルイ15世像が倒されて以来、この広場は目玉となる記念建造物を欠いていたが、それを満たしたのが、ムハンマド・アリ（フランス語読みでメヘメト・アリ）（1769-1849）からルイ・フィリップに贈呈された、ラムゼス2世時代の作品であるルクソール神殿のオベリスクである。エジプトの近代化に協力してくれ

たフランスに対する感謝の印であった。

3,300年を経たバラ色大理石製のこの石柱は、表面に象形文字が刻まれ、高さ23米、重さ320トン以上一枚岩からできている。1836年10月25日、ルイ・フィリップ臨御の下、技師ル・パの指揮により、記念柱は見事に建立されたのである。台座にはこの時の移動と建立に使用された装置類などが図示されている。

54) Passy：現在はパリ第16区の高級住宅地になっているが、1860年にパリ市に合併されるまでは、旧セヌヌ県の村だった。しかしパリに近くセヌヌ川に臨む風光明媚な点と、18世紀に発見された鉄鉱泉の効能などにより、パリ市民の行楽地になり、貴族や文化人の別荘地として有名になった。郊外から搬入される商品に入市税を徴集する税関が設置された。以下の地点も同様である。

55) Batignolles：パリ市西北部の第17区にあるバチニョル大通りにその名を残しているが、以前はパリ市郊外の村だった。1860年にパリ市に合併され、第17区になった。第17区から第8区を通るバチニョル大通り（長さ570米、幅42米）は、その一部が旧バチニョル村の村道で、徴税請負人の柵壁に沿って延びていたクリシー街道と連結して現在の姿になった。1842年当時の人口は14,703人だったが、46年には19,864名と、僅か4年間で5,000人も急増しており、この土地の宅地化の進度が推測できる。

56) Montparnasse：パリ市南部、現在の第16区のモンパルナス大通りとラスパージュ大通りの交差点周辺は瓦礫や廃材などの捨て場になっており、長年の間に積り積って小丘になっていた。17世紀初頭、カルチェ・ラタンの学生たちがこの塵の山を、皮肉ってギリシャの神々の住む山と同じくパルナス山mont Parnasseと呼んだのが地名の起源といわれる。1761年から工事が開始されたモンパルナス大通りの起点に当たったこの塵の山は取り払われたが、1816年頃まではその一部が残っていたという。大通りは完成すると「素晴らしいが、とても寂しい」散歩道になる。人家はほとんどなく全くの田舎だった。1839年に舗装され、43年に街灯がつき、作家や外国の文化人も住みつくコスモポリタンの住宅地になった。

57) Montmartre：パリ市の北部に聳えるモンマルトルの丘は聖ドニが殉教した丘が訛った地名といわれている。モンマルトル街とやがてモンマルトル大通りが開通して徐々に家が建ち、19世紀末に突然、バー、カフェ、キャバレー、劇場などが林立する繁華街に変貌してしまう。しかしそれまでは風車が立ち葡萄畑などが広がっていた郊外の農村であった。モンマルトル街はパリからモンマルトル修道院に通じる道だったのでこの名があ

り、既に 1200 年頃には存在していた。この道はまたパリの城門の一つであるモンマルトル門で終わっていたが、パリ市の発展膨張と共に城門は次第に北へ押し上げられていく。フィリップ・オーギュスト時代は 30 番地にあったが、1380 年には 82 番地、1635 年には 156 番地に移転している。サクレ・クール寺院、テルトル広場をはじめ観光名所が多い。

58) Montrouge : パリ市の第 14 区の南部郊外で、人口約 45,000 人の地域。昔の石切場の坑道がパリ市内にまで延びており、地下墓地のカタコンブに利用されていた。地名の「赤い山」Montrouge は、土の色によるといわれる。普仏戦争の時、パリ防衛に敢闘した要塞があるが、プロシヤ軍のクリップ砲により大損害を被った。ここには第 2 次世界大戦後、戦犯として終身刑の判決を受けたヴィシー政府首班のペタン元師が拘留されている。

59) Ateliers nationaux : 1848 年の 2 月革命で成立した臨時政府が、失業労働者救済のために設置した (2.28.)。組織は軍隊的で、班、分隊、小隊からなり、その指揮官は選挙で決められた。失業している労働者は誰でも加入でき、仕事をしなくても 2 フランの日当が支給されたため、人数はたちまち増加。5 月初旬には 13 万人余に膨れあがってしまい、日当総額も 700 万フランを突破する仕末。しかもこれらの労働者は何もせず日当をもらう者が続出したから、一般市民からも非難の声があがった。臨時政府解体 (5.6.) 後に成立した立憲議会は 6 月 23 日に国立作業場の廃止を決定したため、この措置に反対した労働者たちが暴動を起したが、カヴェニャック將軍の軍隊により徹底的に鎮圧されてしまった (6.23.- 26.)。パリ大司教ドニ・オーギュスト・アフル (1793-1848) がバスチーユ広場からフォーブール・サン・タントワータ街のパリケードに歩み寄り、蜂起した労働者たちに平和を呼びかけた時、銃弾に倒れたのもこの時である。(6.25.被弾、翌々日の 27. 死亡)。

60) Louis Engène Cavaignac (1802-1857) : 父 Jean Baptiste (1762-1829) も大革命時代の国民公会議員、兄 Eléonor Louis Godefroy (1801-1845) も政治家であったが、彼はエコル・ポリテクニク卒業後、軍人となる。1830 年の 7 月革命の時に共和主義的信念を公然と表明したため、アルジェリアに左遷された (1832)。しかし彼はこの征服戦争で抜群の働きを示し、特にトマ・ビュジョ將軍 (1784-1849) の前衛部隊を指揮、1844 年 8 月 15 日のイスリ川の会戦でモロッコ軍 4 萬の大軍を撃破し、アルジェリア平定に大きく貢献した。2 月革命の臨時政府は彼をアルジェリア総督に任命するが、彼はその後間もなく帰国し政界に入り立憲議会の代義士に選出される (1848)。5 月 15 日の請願事件の後に陸相に任命され、6 月暴動を粉碎した。彼は労働者たちがバスチーユ広場周辺に集結

しバリケードを構築するまで静観し、議会から全権を委任され、約2萬の正規軍と国民衛兵軍さらに青年遊撃隊を指揮、バリケードの防禦陣地に立て籠った労働者たちを攻撃し虐殺した。政府側の死者1,400名、労働者側の死者4,000名を超え、鎮圧後は正規の裁判もなく数千名が流刑の処された。この6月暴動は労働者と国民衛兵というブルジョワたちとの階級闘争であった。暴動鎮圧後、「秩序が無秩序に勝った」L'ordre a triomphé de l'anarchie とカヴェニャックは豪語した。議会は彼の功績を認め、カヴェニャックを行政長官に任命した。彼はほとんど軍事独裁といってよい武断政治を行い、公共の秩序の維持のためと称し、戒厳令の実施、新聞発刊停止、暴徒の国外追放や流刑を行った。新憲法成立後、共和国大統領選挙に立候補するが(1848.12.10.)6月暴動の虐殺者の非難と汚名に負けて、ルイ・ナポレオンに惨敗する。1851年12月2日のクー・デタの時、逮捕された後に追放され(1852-54)、許されて帰国後は政界から引退するが、終生共和主義的信念を持ち続けた。

61) Denis Auguste Affre (1793-1848)：フランスの高位聖職者。聖シュルピス会員で独断哲学の教授、1840年にパリ大司教となりパリ大学の独裁に抗して、カルメル学院を創立した。ガリカニズムの信奉者で、ローマ教会と教皇の優越性に反論、ウルトラ・モンタニズムを反駁した『教皇と教会の優越に対する批評的歴史試論』*Essai historique et critique sur la prématie des papes et de l'Eglise* (1829) を発表した。1848年6月暴動の時、蜂起した労働者たちを鎮撫しようとして、勇敢にもフォーブール・サン・タントワヌ街のバリケードに赴いた時、政府軍の兵士が放ったと思われる銃弾にあたり重傷を負い2日後に死去(6.27.)。

62) Hôtel du Rhim：パリ市第1区のヴァンドーム広場の周囲には多くの豪華なホテルが立ち並んでいるが、ルイ・ナポレオンが宿泊した建物は4番地のHôtel de Lambertyeである。1709年にアランソンの財務官Heuzé de Vologerが建築させ、その死後に何度か転売され、大革命以後は家具付きホテル「ライン・モーゼル館」になった。入口は6番地にあった。この広場の建物としてはそれほど立派なものでない。権力を握る前は、ルイ・ナポレオンもあまり豪勢な暮らしはできなかったのだろう。

63) ルイ・ナポレオンが帝位に就くまでは、可成り困難な道程を辿らなければならなかった。政権奪守のための最初の決起は、1836年10月30日、ストラスブールで断行されたが、彼の呼びかけたストラスブールとロレーヌの部隊の兵士は誰一人参加せず、シャルル10世に雇われたペテン師と罵倒される仕末だった。政府は事を荒だてないため、彼を国

外追放という軽罰に処しただけだった。最初ブラジル、次にアメリカに渡り、イギリスに定住したのが1837年である。彼はイギリスに亡命しているボナパルティストと知り合いイギリスの自由主義の保護を受け、社交界の寵児になった。

1840年、セント・ヘレナ島からのナポレオン遺灰の帰国の布告が発表され、フランス国内にボナパルティズムの昂揚の気運があるのを察知したルイ・ナポレオンは、再び武力蜂起による政権奪取をめざす。しかしフランス本土に上陸した彼が期待していた蜂起に参加する筈だったブローニュ兵営の兵士たちは動かず、しかも同志の中に政府の密偵が潜入していて情報を遂一政府側に報告していたため、ルイ・ナポレオンと同志たちは逮捕されてしまう(1840.8.6)。国家に対する大逆罪により、彼は終身禁錮の判決を下され、ソム県ハム要塞監獄に収容された。6年後の1846年5月25日、彼はやっと脱獄に成功、再びイギリスに亡命する。サン・シモンの著作を愛讀し研究したのが、このハム要塞監獄の日々だった。ロンドンに戻った彼は、富裕な高等娼婦ミス・ハワードの愛人におさまる。彼女は彼に献身的に仕えるのだが、やがてフランス政界に返り咲いた彼からつれなく捨てられてしまうのである。それはともあれ、1848年の2月革命後の総選挙で、ルイ・ナポレオンは3つの県から、8月には5つの県から代議士に選出され、皇帝への第一歩を踏み出すのである。(7月末に帰国)。幽閉と亡命の日々の間、幻想的性癖のあった彼は、帝位に就いた時には実現すべき多くの改革を夢想していた。ロンドンのように広大な公園を造成し、パリを大改造する都市計画もその一つである。

64) ルイ・ナポレオンの脱走：1846年5月25日に成功し、翌26日にこの知らせがパリに届き、朝野を驚倒させた。脱走の経過は以下の通りである。ハム要塞監獄で修理工事があり、石工たちが出入りしていた。同志の一人が、石工が着用しているズボン、シャツ、ブラウス、ネックチーフ、庇のついた帽子、木靴を密かに持ちこむ。これらを身につけたルイ・ナポレオンは、髭を剃りかつらを被り、パイプをくわえ、板を担いで右顔をかくし、中庭を通り、城門の看守に囁れ声で通行許可を求める。全く疑いを持たぬ看守が門を開けるとルイ・ナポレオンは悠々とした足取りで跳ね橋を渡り外に出て行った。恐らく同志が近くで待機していたのであろう... この用意周到さは2度の蜂起の失敗からの教訓だったろうし、皇帝への権力奪取のための1851年12月2日のクー・デタにも見られるものである。

65) フランス初の共和国大統領選挙の投票数は以下の通りである。

ルイ・ナポレオン・ボナパルト　　5,434,226　当選

カヴェニャック	1,448,107
ルドリュ・ロラン	370,119
ラスパーユ	36,920
ラマルチース	17,940
シャンガルニエ	4,790
以下無効票も含め	12,600

ルイ・ナポレオンが圧倒的多数で選出されたが、国民各層が秩序と繁栄を実現し、かつ偉大にして栄光ある祖国フランスの再建を、ナポレオン1世の甥ルイ・ナポレオンに托したためといえよう。哀れをとどめたのはラマルチースで詩人の幻想からの立候補は惨敗に終わり、選挙運動のための莫大な借金が彼を終生苦しめる事となる。

66) 1848年12月20日共和国大統領に就任したルイ・ナポレオンは、議会で憲法遵守を宣誓、早速組閣にとりかかった。首相兼法相のオディロン・バロ(1791-1873)は王党派、内相のレオン・ド・マレヴィル(1803-1879)は穏健な共和派、外相のエドワール・ドリュイアン・ド・リュス(1805-1881)は保守派、陸相のジョゼフ・マルスラン・リュリエール将軍(1787-1862)はボナパルティスト、経済相のイポリット・パッシー(1793-1880)は自由貿易論者、文相のフレデリック・アルフレッド・ピエール・ファルル伯爵(1811-1886)は王統王朝主義者であった。間もなく大統領と不和になった内相マレヴィルは辞職、後任はレオン・フォーシェ(1804-1854)となり、彼が就任していた公共労働相はベルトラン・テオバルド・ジョゼフ・ラクロス(1796-1865)が就任、ルイ・ジョゼフ・ビュフェ(1818-1898)は農商相に就任した。バロ、ビュフェは後にルイ・ナポレオンのクー・デタに反対し下野するのである。

(続 く)

(後 記)

- (1) 参考図書などは、〔I〕の巻末に掲載してありますので、そちらを御参照ください。
- (2) 前稿〔XXIII〕に校正ミスがありました。下線の如くご訂正下さい。

p. 2. 上から 2 行目 要求

- p. 21. 上から 11 行目　ヴェズレー教会
- p. 27. 上から 2 行目　1600 年ほど前の
- p. 29. 上から 3 行目　ロアン家とと
- p. 30. 上から 9 行目　民衆をを

— 2008.6.16. —